

### 3 1 「レガシー(Legacy)」

素晴らしい本にめぐり合った。その本は『いのちの中にある地球』。

日本人の祖先を持ち、欧米で広く尊敬を集めているデヴィッド・スズキ David Suzuki が、39年間勤めたプリティシュ・コロンビア大学で行った最終講義「遺す言葉(レガシー)」をもとにまとめられた本である。この本には彼の人生経験のエッセンスが詰め込まれている。

デヴィッド・スズキは、1936年カナダ・バンクーバー生まれの日系三世。生物学者で環境運動家である。

CBC(カナダ放送協会)テレビの長寿番組「ネイチャー・オブ・シングズ(The Nature of Things)」のパーソナリティーとして30年以上活躍。この番組は、カナダ人の多くが「デヴィッドを見ながら育った」と言うほど親しまれた人気番組だ。

近代の科学的合理主義の限界を早くから指摘し、カナダ先住民の英知が環境問題解決の鍵を握っていると考えるようになった。それまで白人科学者たちによって語られてきた環境学に、はじめてマイノリティーの思想を取り入れた功績はとても大きい。

構成は次のとおりである。

一章 超生物の出現

二章 新たな道をもとめて

三章 未来のためのビジョン

三章の「世界を新たな目で見る」という項の中に、とても感動的な文章があった。それをそのままここに載せたいと思う。

いま私は、バンクーバーの海辺の家に住んでいますが、以前、「不動産売買はいまがチャンス」という業者からの手紙をもらったことがあります。

いまの家を売り、もっといい家を手に入れろ、というわけです。これがきっかけになって、私はわが家という資産のなかで何がもっとも価値あるものなのか、考えてみることにしました。

私の家は、妻の両親と三十年間暮らした場所です。つまり、私の子どもたちが生まれ育ったのは、「二階におじいちゃん、おばあちゃんがいる家」なのです。私にとって、まずこれが、この家の大きな価値です。

家具職人だった私の父は、私と妻のタラが結婚したとき、当初住んでいたアパートのためにと、食器棚をつくってくれました。それをもって現在の家に引っ越しましたが、台所におくためにその一部を取りはずさなければなりません。まあ、あまり体裁がいいとはいえません。けれども、父はいつもその棚とともにあるのです。これも私の「価値あるものリスト」に入ります。

義理の父は熱心な園芸家で、私がアスパラガスとラズベリーが好きだということで、私のためだけに植えてくれました。これもリスト入りです。

あるとき、私の親友ジム・マーレイが遊びにきて、私がつくりかけていた柵のくぐり戸に取っ手をつくってくれました。この戸を通るたびに、彼のことを思います。これもリスト入りです。

私の子どもたちは、死んだ鳥やヘビやリスをもち帰っては、ハナミズキの木の下に埋めていました。この動物霊園もリスト入りです。

ハナミズキの木には、私がつくつたツリーハウスがあり、子どもたちはそこで長い時間、楽しく遊んで過ごしました。これも私には貴重な財産です。

こんなふうにしてつくったリストを眺めてみると、たんなる不動産でしかなかったものを「わが家」に変えてくれた、かけがえのないものばかりです。しかし、市場ではなんの価値もありません。それこそが問題なのです。すべてを経済価値ではかろうとすると、ほんとうに大切なものが価値のないものと見なされてしまうのですから。

生物圏もまた、私たちの「わが家」です。人間とともにこの同じ「家」に生を享けたほかの生きものたちは、資源でも、ビジネス・チャンスでも、商品でもありません。彼らはみな、私たち人間の親類です。彼らは寛大にも、私たちにとってもっとも基本的な欲求を満たしてくれるばかりか、ともに生きるパートナーとして私たちをなぐさめ、美と神秘によって感動や畏怖の念を呼び起こし、人生を豊かなものにしてくれるのです。

私たちは新たな目で世界を見なければなりません。どう見るかによって、その世界との接しかたが決まるのですから。

友人で人類学者のウェイド・デイヴィスが、ペルーにあるアンデス山中の村に私を連れていってくれたことがあります。村人たちは、目のまえにそびえる山はアプ(神)であり、それが自分たちの運命を左右していると教えられていました。ウェイドは私にこういいました。「聖なるものとしてこの山に接する彼らと、山は金になる鉱物であふれていると教えられて育つぼくたちの国の人びととを比べてごらん！」

川は大地の血管でしょうか、それともたんなる灌漑や発電のための資源でしょうか？森は聖なる場所でしょうか、それとも木材やパルプにすぎないのでしょうか？

土は生きている、それとも靴につくよごれにすぎない？家は家庭、それともたんなる不動産？地球は神聖なる星でしょうか、それとも金もうけの好機でしょうか？

どんな価値観や信念をもっているかによって、私たちがこの世界にどう接するかが決まるのです。

私にとって英雄であり、精神的な師でもあった父は、1994年、85歳でがんに侵されていることを知りました。痛みはなく、その心は明晰でした。父の人生最後の数か月、私は介護をするために同居して、ともにすばらしい時間を過ごしました。

父は死を恐れてはいませんでした。私はまだ生きている父に手伝ってもらいながら、次のような追悼文を書いたのです。

「5月8日、カール・カオル・スズキは安らかに逝去した。享年85歳。遺灰は、クアドラ島の風のなかにまかれる。彼は、日本の伝統的な自然信仰に大きな力を見いだしてきた。死を目のまえにして、息子である私に彼はこういった。

『私は自然からやってきた。だからそこに帰っていくよ。そして魚や樹木や鳥の一部になる。それが私の転生だ。豊かで充実した人生だった。悔いはない。おまえの記憶のなかで、そして孫たちのなかで、私は生きつづけていくよ』

父はこうもいいました。「木々を吹き抜ける風のささやきが聞こえたら、そして海に躍るサケの閃きが見えたら、私はそこにいる」と。

父は金持ちだったことはありませんが、死をまえにして「デヴィッド、私はなんと裕福なんだろう」とくり返していました。ともに過ごした日々のなかで、父が洒落た服や大きな車や立派な家の話をした

ことは一度もありません。それらは、ただのモノにすぎません。

私たちが語りあったのは、家族、友人、隣人、そして私たちがいっしょにしたことについてでした。それが父にとっての富であり財産だったのです。一生を通じて積み重ねてきた思い出、紡いできたつながりや絆---その点で父はたしかに裕福な人でした。

両親が逝き、私も年寄りとなり、自分自身の死について考えるようになりました。父のように潔く、品位をもってそのときを迎えられるといいのですが。

また、現代科学のなかから浮かびあがりつつあるすばらしい物語も、私を勇気づけてくれます。

それは、あのビッグ・バンの瞬間から、物質を生みだしつつ宇宙が拡大していく過程で、すべての粒子がたがいに引きあう力をもっていた、という話です。

かつて想像されたように、宇宙はそのほとんどがからっぽの空間なのではなく、かすかな引力の糸で満ちあふれている。この引きあう力こそが愛のもとだと信じている科学者もいます。そして、宇宙という編みものなかには、この一種の愛が編みこまれているのだ、と。

科学が教えるところによれば、天の川は、宇宙の中心から遠く、遠く離れた辺境の地にある、何の変哲もない銀河です。その銀河の何十億という星のなかでは、あの太陽もひとつの平凡な星にすぎません。

そして、その太陽系の第三惑星であり、宇宙のなかの塵のような存在にすぎない地球で、宇宙史の最後の四半期に、生命が出現したのです。

そして、その時間の流れの最後の瞬間になって、驚くべきことが起こります。自己を認識する能力やすぐれた創造性に恵まれ、愛と好奇心という素質をあわせもった生物が、自然のなかから出現したのです。この生物はいくつもの方法を編みだしては、混沌とした世界を株序と意味に満ちた世界へと変え、瞬く間にほかの生物から抜きん出た存在となりました。

しかし、爆発的な変化のただなかで、どうやら道に迷ってしまったようです。自分が何者であり、なぜここにいて、ほんとうはどこにいるべきなのかを教えてくださいの物語を、忘れてしまったのです。

私たち人間は、地球生命史のなかの新米で、種としてはまだ赤ん坊に等しい存在です。

いっぽう、宇宙における自分の立ち位置を知ったり、まだ見ぬ世界を思い描いたりする早熟さをもちあわせた生きものでもあります。

私は信じています。人類はこれまで以上に偉大なことをなしとげるにちがいない、と。

自分の「わが家」を再発見し、「聖なる元素」と調和して生きる術を見つけ、喜びと幸せと生きがいとに満ちた、ほんとうの意味での豊かな未来をつくりだす、と。

孫たちがすっかりおとなとなり、親となるまえに、私はこの世を去るでしょう。しかし、私は彼らの未来を想像して希望に胸をふくらませています。機会と美と驚きに満ち、ほかの生きものたちとの豊かな交流にあふれた未来が、彼らを待っているにちがいない、と。

必要なのは夢を見る力、そしてそれを実現する意志だけです。

本当に大切なものとは、家族であり、友人、隣人であり、そして人の心、子供の心であり、思い出であり、心のこもった物である。

彼にとって、本当の意味での“人”とは、カナダ先住民でありアンデス山中の村に住む人なのである。

デヴィッド・スズキは、セヴァン・カリス・スズキの父親である。

1992年リオの地球環境サミットで、当時12歳の少女、セヴァン・カリス・スズキは、世界の指導者たちを前にスピーチを行った。それは世界中に感動を与えた「伝説のスピーチ」といわれている。

そのスピーチの内容は勿論、話し方も実に堂々としていて、この父にしてこの子あり、ということを実感させる。大人たちや、一般の価値観に対して痛烈な批判を込め、強いメッセージ性のあるすばらしいスピーチである。

「付 - 6」にそのスピーチ全文を掲げる。(2011.11.11)